養老川流域の歴史散歩

―　西広の台地から考えてみる　―

総の国をかたる会
白鳥　元治

1 はじめに

国分寺台地区の東南部突端の台地は、西広である。眼下では、養老川が腰をくねらせている。ここから眺める景観は、有史以前から時間が流れて作った沖積平地に、水田が広がりその眺望はすばらしいものがある。東側は国道 297 号線が、台地を割って通る。海士有木の踏み切りから、急勾配となる山倉の坂道である。登りきって信号左の道路は、市役所通となる。この台地の中腹に前広神社があり、東の国道に隣接して山倉古墳群の遺跡がある。さらに北西の上層部に、西広貝塚といった遺跡がある。調べ知っていくうちに、これらの遺跡や神社の存在はバラバラに捉えるのではなく、養老川(養老河)が育み生んだ一連の生活文化ものとして、考えるべきだろうと思うようになった。このことを象徴しているのが、前広神社ではなかろうか。今回はこのような視点から、話題を提供したい。考古学の道に携さわっいる人が、発想するようなことではない。しかし余計に、自由に羽ばたいた想いができる。

日本が国としの体制がまだ整わない律令国家以前の姿の国土の時代である。

2 前広神社がかたっていること

前広神社

斜面にへばり付くような団地を区画している坂道は、かなりの急勾配である。それを登って、参道の階段を見上げる鳥居の前に立つと、「前広神社」の前広とはこのことかもしれないと直感的に思った。延々と広がる眼下の景観に、ある感慨さえ湧いたことを覚えている。この台地に立った私の実感である。遥か遠い昔、目の前の住宅郡は当然存在しなかったから、なおさらのことである。前広神社の所在地は、西広である。地名の西広(サイヒロ) は、前広(サキヒロ)の音韻転化と言われていることが通説である。この神社は知られていないようだが、古代上総国の中心地国府・国分寺の近くにあり、中央にも早くからこの名が知られていた有力な社(ヤシロ)であったといってよい。

「三代実録」に、貞観 10 年(868)9 月 17 日 「正六位上前康神杜を従五位下に昇叙する」という記事にその名が見える古社である。以外と知られていないが、なぜこの台地に朝廷からも認められた神社が、存在しているかということである。神杜の由来とか伝承をしらべることによって、ある程度推測できるのだが、前廣(広)神社にはこれといった伝承もないようだ。祭神は、大山紙(オオヤマツミ)神である。「くにつかみ」のことで、この祭神をもつ神社は全国にある。この祭神を考えてみることにより、神社の本質がある程度わかる。「オオヤマツミ」と読ませるらしいが、「つ」は助詞の「の」にあたる古語であり、「み」は神霊の意を表す。だからこの神名は、「偉大なる山の神」の意である。神話にも登場し古事記では、「大山津見神」と書かれている。本居宣長の古事記伝のなかでは、山津見とは山津持(ヤマツモチヤ)、すなわち山を持ち山を司る神のことであるという賀茂真淵の説を紹介している。神話に登場する神であるが、別名和他志であるが、「ワタ」は海の古語で海の神を表す。山・海の両方を司る神ということになる。山と海の神、すなわち自然崇拝であるといえる。いわゆる自然の中に、神を感じた縄文人たちの精神とつながる神である。自然に宿る神なのだ。瑞的にいえば、その地の土着の神を祭ったもので、「国つ神」といえる。「国つ神」とは、「天つ神」に対していう神である。では神話の中では、どんな関係をもって語られているのだろうか。

古事記に書かれている大山津見神は、イザナギ・イザナミニ尊の神生みの神々の一つであり、天孫降臨以前からあった神である。いってみれば縄文人たちが、各地に土着していて地方を治めていた自然崇拝の神である。それが、天孫降臨の神であるイザナギ・イザナミとの間に生まれた神となれぱ、天つ神の子として関係する姿が浮かんでくるではないか。それは大和朝廷の東征によって、地方がその配下になっていく姿でもあり、その正当性を神話として成立させていった過程でもある。一方現在、各地の神社に紀られている大山紙神は、神話にあまり関係づけることなく山の神として、一般に信仰されてきた神であ

るのは、天孫降臨以前から地方の地に根付いてきたにちがいない。それを延喜式にあるように格式を与えてきたのは、朝廷の権威として公的に知ら示そうとしたともいえそうだ。

前廣神社は、古代上総国の中心地に近いだけあって、中央には早くからその名が知れる有力な社であったのだろう。国分寺台地の北西から、南東に延びる台地の中腹あたりで、南西を向いて鎖座している。位置からいって、もともとは菊間国造の祭神となっていたとも推測できる。真下の養老川の対岸は、上海上国造の古墳と地域集落が望めたはずだ。ではここが縄文期より、神聖な神の地として紀られてきたのはなにによるのであろうか。前廣神社の背後は、大規模な西広貝塚であり近接して、山倉古墳群があることと無関係ではあるまい。縄文期からこの地を、根拠地としてきた人々の精神的な大いなる拠り所であったことから、神が生まれたのだろう。